［ 巻頭対談 ］

知識人になるということ

― 大学と教養教育 ―

大江健三郎　作家
古田　元夫　東京大学副学長

社会の枠組みにおいて大きな変化が起き始めている現在、学窓を巣立つ卒業生達にも「海図なき航海に耐え得る人材」たることが求められています。そこで、今回の巻頭対談では、本学の卒業生であり、最近、『さようなら、私の本よ!』を上梓されたノーベル賞作家、大江健三郎氏をお招きして、古田元夫副学長とご対談いただきました。

淡青
［TANSEI］
東京大学広報誌　第17号
The University of Tokyo Magazine January, 2006 Vol.17
2006/01
17

「淡青」について

東京大学と京都大学（当時は東京帝国大学、京都帝国大学）が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青（ライト・ブルー）」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

淡青17号をお届けいたします。今回は特集として、東京大学の卒業生を取り上げました。本学では毎年およそ3000名の学部生、3000名の大学院生が卒業・修了し、社会のさまざまな分野へと巣立っております。ここでは、東京大学卒業生の幅広い分野における活躍ぶりにスポットをあててみました。

対談のコーナーでは、本学文学部の卒業生であるノーベル賞作家の大江健三郎氏をお招きし、学生時代のこと、そして大学における教養のありかたなどをめぐって、古田副学長とお話いただきました。

また、卒業生の多彩な活動の一端として、宇宙飛行士の野口聡一氏、そして禅の修行とその普及につとめられる藤田一照氏を取り上げました。

あわせて本学における卒業生組織の活性化に向けての取り組み（学友会、ホームカミングデイなど）も紹介いたします。

宇宙から精神世界に至るまで、まことに幅広い舞台に立つ東京大学卒業生の活躍ぶり、その多彩さをご覧いただければ幸いです。

広報委員会委員長　大木　康

Contents

02 ［ 巻頭対談 ］
知識人になるということ
ゲスト　大江健三郎（作家）

12 ［ 特集 ］
卒業生 ― それぞれの志を胸に ―

20 ［ 教育・研究の現場から ］
法科大学院／生産技術研究所

22 ［ サイエンスへの招待 ］
運動器と運動の大切さを知る／バイオマスからの輸送用液体燃料製造

24 ［ キャンパス散歩 ］
人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

26 キャンパスニュース

「学志」を喚起するために

古田　最近、私は学生に対する相反する2つの評価の間で揺れています。ひとつは「非常に優秀な学生が増えている」ということです。私はベトナムの研究をしておりますが、ベトナム語は6つの声調がある言語で、日本人にとって、聞いたり話したりするのが難しい言葉なんです。しかし、最近の日本の若い学生の発音は、すばらしいものがあります。ベトナム語は若い女性が話すと小鳥がさえずるように聞こえる美しい言語ですが、そういう語学力を持つ学生が増えています。ちなみに、私のベトナム語はどう聞いても小鳥のさえずりとは無縁ですが(笑)。それから、学生のレポートや卒論などを見ますと、日本語表現が下手で、50枚以上になると論理が乱れるなど、甚だ不安になるのですが、そんな学生が博士課程に進んで書いた論文を見ますと、実に堂々たるもので「素晴らしい」と思うことが多々あります。そして、「私達の世代が持っていないものを備えた新しい力が育っているんだな」と思うのです。

ところが、もう一方では外国語をマスターすることを面倒くさがる学生が増える傾向も出てきています。私のやっている分野は地域研究ですので地域言語をマスターすることは必要不可欠なのですが、「言葉を苦労して学んでフィールドワークをやってコツコツと資料を集めて、ひとつの成果をまとめていく」という姿勢を欠く傾向があるんですね。

我々はこの問題を学力の問題ではなくて、学への志という意味での「学志(がくし)」の問題だと考えておりまして、どうすれば東京大学で「学志」を喚起できるかということが大きな問題意識になっています。今年度の入学式で、小宮山総長は「本質をとらえる知、他者を感じる力、先頭を走る勇気の3つの要素を備えるように努力してほしい」と新入生に話されました。それはどこかで、私が今、申し上げた「学志」と関わるのかなと思います。

大江健三郎賞創設に際して大江先生が書かれた「文学の言葉を回復させる」という一文を拝読したのですが、「情報やテクノロジーが支配する社会で文学の言葉が痩せていくことに関する危惧」とともに「新たな文学の言葉が育ってくる可能性への強い期待」を持って、賞を作られたのかなと思い、私どもの「学志」をめぐる状況と同質のものを感じました。そのようなことも含めて今の学生に関するお考えをうかがえればと思います。

大江　今のお話をうかがって、駒場や本郷にいた頃のことを思い出していました。当時の私も、まず発音の上で言葉をマスターしてフィールドワークもできるようになることに憧れていたんですね。でも、難しかった。私はフランス文学科ですが、読むだけに徹したんです。1日に50ページくらい読むことにしたんですね。ですから、フランス語の会話はマスターできなかった。フランス人と議論したり調査したりできる人は非常に特別な人で、蓮實重彦さん(本学元総長)は大丈夫だったでしょう(笑)。当時はそういう人達は非常に特殊で一般の学生は話したりはできなかった。しかし、私は今でも東京大学に非常に感

どうすれば「学志」を喚起できるかということが大きな問題意識になっています。

古田　元夫

1949年生まれ。74年教養学部卒。78年大学院社会学研究科博士課程中退。95年教養学部教授。01～03年大学院総合文化研究科長・教養学部長。04～05年副学長(理事)

謝しているんです。東大で学んだことは「外国語を読むこと」。外国語の本を読む基盤を作っていただいたと思うんです。英語の基盤、フランス語の基盤。大学入学から50年になりますが、1ページも外国語を読まなかった日はないと思うくらいです。私達、文学の人間は大体、本を読んでいればいいんですが、本を一生読んでいくための方向づけをしていただいた。私はその基盤をもって文学の仕事をしてきたんですね。

古田　それは我が大学にとっても非常に嬉しいことですね。

大江　それから、20歳の時に駒場の生協で2冊の本を買いました。今でもそれを持っておりますが京都大学の深瀬基寛先生が書かれた『オーデン詩集』と『エリオット』です。この2冊の特徴は原典が載っていること。オーデンの詩集は巻末に原典がある。エリオットのほうはページの下段に原典がある。当時の学生は丸善で原書を探したんですが、学生が買いたい本は先生方が買ってしまっているので手に入らない。そんな時に本が出たので買って読んだ。それを学生時代にずっと読んでいたので、私の初期・中期の仕事は明らかにオーデンの影響下にあるんです。『見るまえに跳べ』という小説を書きましたが、そのタイトルはオーデンの初期の詩の1行です。『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』という作品のタイトルも上海事変の頃の中国人に成り代わってオーデンが書いた詩から来ています。私の初期・中期作品のオーデンの影響を開いてくださったのは深瀬基寛先生の本なんです。

最近、私は『さようなら、私の本よ！』という小説を書いたんですが、明らかにエリオットの影響によるものなんですね。駒場の時にもエリオットの詩を読んでいたけれども、初期のエリオットの『プルーフロックの恋歌（The Love Song of J. Alfred Prufrock）』などは理解できた。ところが、『ゲロンチョン（Gerontion）』という詩を読むと、もう解らなくなるんです。それから、深瀬基寛先生の『エリオット』という本ではエリオットの晩年の『Four Quartets』という作品を扱っていないんですが、当時、私は何とかして『Four Quartets』のテキストを手に入れたいと思って、ブリテッシュ・カウンシルに行って写させてもらった。コピーなんかない時代ですからね。卒業後もそれを読んでいたけれど、ずっと解らなかったんです（編集部註：現在、邦訳としては『四つの四重奏曲』大修館書店刊がある）。ところが、60歳を過ぎて神田の本屋で非常にきれいな『Four Quartets』を見つけました。ちょっと高かったんですが、それを買って電車に乗って読み始めたら、1行1行すっと解る氣がした、今まで読んでも解らなかった長い詩が。それで夢中になって『さようなら、私の本よ！』を書いたんです。ですから、私は東大に作っていただいた「読む能力の基盤」に基づいてずっと生きていたし、仕事をしてきた。それが現在まで続いていて、学生時代に駒場で買った2冊の本は「私の人生と大学の関係」を象徴しているんです。

古田　大江先生の作家活動にそれほど影

東大で学んだことは「外国語を読むこと」。外国語の本を読む基盤を作っていただいたと思うんです。

大江　健三郎

作家。1994年、ノーベル文学賞受賞。
＜略歴は11ページ＞

東京大学は「教養学部を残す選択をした大学」として教養教育の重要性を常に強調すべき立場にあるんです。
— 古田 —

響を与えた本を駒場で手に入れられたということ……嬉しい驚きです。

「永遠の大学」に学ぶ

大江　もうひとつ、駒場時代の私が幸福だったのは、非常に素晴らしい先生方に出会ったことです。高校時代、私は渡辺一夫さんの『フランス・ルネサンス断章』という岩波新書を読んで「この人に習おう」と決めました。それまでは大学に行く意思はなかったんです。うちは母子家庭ですしね。でも、東大に行って渡辺さんに習いたかったので、高等学校の勉強をすべてなげうって、受験勉強を始めました。1年目は落ちましたが、翌年合格して20歳の時に渡辺一夫さんの集中講義を初めて駒場で聞きました。100 分の講義を2回聞いて、私は「人生の目的を達した」と思いましたよ。「こんなに素晴らしい人がいるんだな」と感じた。渡辺一夫さんを一言で言うと「知識人」という言い方が正しいと思うんです。フランス文学の専門家である渡辺さんと一体をなす「知識人としての渡辺一夫」があって、その人に習ったことが私の一生を決めました。私に「生きていく上での思想」があるとすれば、それは渡辺さんに教わってきたのだと思っています。先生の本を読むこと、先生にしばしばお会いすることで私の思想と人間が作られてきたんです。

古田　大学は、尊敬する人物との出会いの場でもあったわけですね。

大江　本郷でのフランス文学の先生のひとりはベルナール・フランクさんでした。フランクさんが話されるフランス語は私には聞き取れないので、友達にノートを見せてもらって勉強していたんですが、ある時、先生が『今昔物語』の翻訳をしていることをフランス語で話されました。その時は話された内容が妙に私に解ったんです（笑）。それで授業が終わった後に先生に質問に行きました。「あなたは古代の日本が非常に開放された文化的な環境だったと言われましたが、どういう点でそう思われたんでしょうか」と聞くと、先生は、まず、紙を取り出して私の言ったことを文法的に正しく書いて「こうでしょうか」と言われた。「はい」と答えます。その日以来、授業が終わって先生のところに行くといろいろと話してくださるようになったわけです。フランクさんはサンスクリット、中国語、日本漢文を読める人なんですね。最初の質問にフランクさんはこう答えてくださいました。

「唐の時代の中国には非常に開放的な国際文明があって、その文明を受け入れようとする人達に寛大だった。日本は唐の国際文明の開放性と寛大さを自然な形でどんなコンプレックスもなしに受け入れて日本文化を作ったのだ」。今日、当時の日記を読み返してきたので、確かにそうおっしゃったと思います。さらに、フランクさんは「そのことを文学論としても、文化論としても、文明論としてすらも、研究して本を書きたい」と言われました。私はそれを聞いて「この人は偉い人だ」と思ったんです。そして、「自分は山奥で生まれてフランス語も読むことしかできない人間だけれども、がんばれば外国の文明を受け入れることができるのではないか」と思いました。唐の時代に平城京や平安京の人間がそうやっていたのだから。私は「自分の文学を将来、外国に向かって開いていくものにしよう」と決心しました。

今度、私はフランス国立東洋語学校、ラング・ゾー（Institut National des Langues et Civilisations Orientales ）の名誉博士号をもらうんです。今までやってきた仕事があるにしても、学問はないのだし、博士号をもらう資格があるはずはない、とは思います。しかし、その仕事の礎を築いてくれたのは渡辺先生やフランク先生であり、東京大学だったわけですから、もらいに行きます（笑）。

古田　今のお話、それから2004年度の本学卒業式でのご講演の中にもありましたが、渡辺先生の示唆によって、大江先生が3年ごとに主題を決めて、ある作家なり、詩人なり、思想家に取り組み、しかも多くの場合、直接、原典に取り組んでこられて、エリオットで15人目になったというお話をうかがって「すごいな」と思ったんです。課題を決めて本を読む、直接原典で本を読む、それをもとにして小説を書くというスタイルの中に、高校時代に渡辺先

生の著書と出会われてから現在に至るまで、大江先生の中に「永遠の大学」があるのかな、と。

大江　「永遠の大学」というのは本当に正確な言葉ですね。

「知識人」であるということ

大江　大学を卒業する頃、私は「小説家になるので大学院には行きません」と渡辺先生に言いに行ったんです。当時、私は友人の妹と結婚しようと思っていて「お金が要るので小説を書こう」という邪な志で仕事を始めた頃でした(笑)。大学院に行かないことを話したら先生は初め不機嫌でしたが、やがて機嫌を直されて「小説家になって綺麗な方と結婚されるのもよろしいでしょう」と言われたんですね。私がニコニコしたと先生はその後よく言われたけど(笑)。まあニコニコしたんでしょう(笑)。続けて、先生はこうおっしゃったんです。

「小説だけ書いて一生を過ごすと君は退屈するに違いない。退屈しないためには3年毎に主題を決めて、それを読むことにすればいい」。その次が重要なんです。「3年経ったら読むのをやめるように。なぜならば、3年経てば、ある詩人、ある作家、ある思想家の輪郭は掴める。しかし3年では絶対に専門家になれない。もし専門家になろうとするなら、次の3年もその主題の読書を続けなければいけない。そうすると君の視野はまず狭くなってくる。専門家が狭く深いのはいい。しかし、小説家が生半可な独学の勉強をして専門家になったつもりでいるのが一番いけない。君の先輩の仏文出身の小説家を見ろ」と言われた(笑)。私が外に対してこのことを話したのは今日が初めてですけどね(笑)。あの時、渡辺先生が言われた「3年間だけ読む方法」は、「知識人をつくるための教育」だったと思うんです。

古田　それはまさに、大学卒業後も「学志」を持ち続けることによって「知識人」となるということですね。

大江　まさにそうなんです…卒業式でも言いましたが、私はエドワード・W・サイードの『Représentation des Intellectuels』という本(編集部註：英語版は『Representations of the Intellectual』、邦語版は大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社刊)を読んで、彼と何度も話したことがあります。

「知識人は世界に対してはっきりと表現し、主張しなければいけない。それが知識人の条件だ」とサイードは言うんです。英語で言えばrepresentationあるいはrepresentという言葉が知識人の本質を強調している、と。さらに彼は「自分がどういう人達を代弁しているかを意識せよ」とも言います。そこで自分のことを振り返ってみますと……私は「九条の会」という活動をやっていて「日本は憲法を変えずに平和主義でやっていこう」という主張を持っている。そして、講演会などでそのことを明瞭に表現したいと思っている。また、「自分がどんな人達と一緒に発言しているか」を意識している……サイードが言うrepresentationをやっていると思うんですね。

古田　「学志」を持ち続けて「知識人」となられた大江先生は、そのような形で知識人としての「表現」を行なっているのですね。

大江　それから、もうひとつ、サイードは「アマチュアとして社会にrepresentすることが知識人の役割だ」と言います。知識人は自分の仕事の現場では専門家ですね。渡辺一夫先生はフランソワ・ラブレーの世界的な専門家。ベルナール・フランク先生は中国・日本の古代の研究から出発して、東洋の民衆信仰の専門家です。さらにサイードは「知識人による社会批評はモラリティ、倫理性を足場にする」と言うわけですね。

そのような考え方から、今、東大生に何を望むかと言いますと……専門家になれる少数のエリート諸君は「現地の人達と討論もでき、フィールドワークもちゃんとできるような勉強」をやってもらいたい。そういう方は「学志」を持ってやっている少数派ですが、少し怠けて外国語が面倒くさいと思っている人も「学志」という基本態度は大学にいる間に獲得すべきだと言いたいんです。私は大学をそういう場

として考えているわけです。大学生の段階で「一生、本が読めるくらいの外国語力をつけること」、「その人のように生きたいと思う人物に出会うこと」、「専門家になるのでなくとも『学志』を自分の中にかちとること」が重要だと私は考えています。

しかし、その一方で「社会に出てから有用な人間を養成する大学」がありますね。ハーバードビジネススクールのような。それはそれでいいと思っていますが。

「実学」と「虚学」

古田　今の大江先生のお話の中に非常に重要な論点が出てきていると思います。本学も2004年4月に法人化しまして、法人化のひとつの意味は「大学と社会の関係を見直すこと」にあると思います。ですから法人化と軌を一にして、いくつか専門職大学院を作りました。ロースクールや公共政策の専門職大学院を作って「社会との連携」を強化する試みをやっています。しかし、これは「社会的ニーズに直接対応するような狭い意味での実用的教育を重視する方向に東京大学が向かう」ということではないと、私は考えております。やはり、学問そのものの発展を促すような教育的課題も非常に重視していく必要があろう、「実学」だけではなく「虚学」も大切にしていく姿勢が必要だろう、と。そのように考えますと、学部教育での大きな柱のひとつは「教養教育の重視」だと思っております。学生の間で「実用的な資格をとりたい」という志向が強まっている状況の中でこそ、学問への動機づけを養い、知の形成と人間性の開花を促すような教育が必要なのではないかと思います。それはおそらく、大江先生がおっしゃった「知識人たること」と同質なのだろうと思うんですが。

大江　まさにそうですね。

古田　社会の基本的なあり方が大きく変わろうとしている現在、「海図なき航海に耐え得る人材」を輩出していく必要があると思います。それはきっと「知識人」だと思うんです。東京大学は教養学部を今も残しておりますので「教養学部を残す選択をした大学」として教養教育の重要性を常に強調すべき立場にあるんです。幸い、本学だけではなく、日本の他の大学でも、北京大学、ソウル国立大学、ベトナムの国家大学など、アジア各国の大学でも、「教養教育」の重要さが見直されてきておりますので、多少、心強さを感じています。

大江　従来、日本では「教養主義」が他の国に比較してしっかりしていたと思うのです。例えば、私はバークレー、プリンストン、ハーバードといったアメリカの大学に何箇月かずつ、何度も行ってきたんですが、大学の中で人々と話している限りは「世界の普遍的な教養の中にいる」という印象があるんです。ところが、キャンパスから一歩離れると、教養主義的な雰囲気はないという印象を持つんですね。日本の場合は明治の近代化以後、例えば、大学に行かない人でも福沢諭吉の本を読む。教養を大切にして生活の中に導こうとする「学志」が社会の特徴としてあったのではないかと思います。私は農村の人間ですけれども、農村でもちゃんと勉強している人がいるわけですね。お医者様とかお坊さんとか、地主さんのぼっちゃんなど。そういう特徴は現在でも続いていますね。大学の中では研究は行なわれているし、社会に出てからも学問への志を持っている人は存在している……例えば、この前、亡くなった元日銀理事の吉野俊彦さんは学問研究的な側面が非常にはっきりしている人ですね（編集部註：吉野氏はエコノミストとしての著書多数。森鴎外研究でも知られている）。私は、今でもああいう人が銀行にたくさんいると思うんです。だから、「社会にいる知識人」に文学を読んでもらいたい。「文学の言葉」は外国人と深く理解し合うための共通の武器になると私は信じているんです。

古田　「文学の言葉」が有用なのは文学者だけではないんですね。

大江　私はそう思うんです。アマーティア・センさんと私は往復書簡を公表しましたが、私が手紙の中に引用したのは先ほど挙げたエリオットの『Four Quartets』で

した。センさんの解釈に私は疑問があるんですが(笑)、それはそれとして、彼とエリオットについて話すことがどんなに私をセンさんに近づけたか。それで「こういう言葉の感覚の人だったら著書を読んでも解るだろう」と思ってセンさんの本を読み始めたわけです。センさんの本も3年間、読んだんです。数学的な部分はむりですが、思考の大筋は理解できるし、言葉の感覚が文学的なんです。センさんのお父さんがタゴール(編集部駐：ラビンドラナート・タゴール。インドの著名な詩人であり、思想家。アジア初のノーベル賞受賞者)の作った学園の教師だったということもありますしね。

大企業の働き手も官僚も政治家も、共通の言葉を持っていたら、お互いの間に質の高いコミュニケーションがあり得る。その共通の言葉は「文学の言葉」だと私は考えているんです。私は大江健三郎賞というのを作って、みんなから笑われているんですが、賞を作った目的はそこにあるんです。「実学」と「虚学的な場面から学びとったもの」が一人の人間の中ではっきり結び合った人間が私の理想の人間像です。そういう人が社会に向かって発言するようになった時、彼は「知識人」と言われると私は考えています。

古田　大学にいますと実感として「読むこと」が非常に大切だと感じます。ですから「どうしたら学生が本を読んでくれるか」で四苦八苦しておりまして、2004年3月に『教養のためのブックガイド』(東京大学出版会刊)という本を出しました。「こんなものを出すのはやめておけ」という議論もあったんですが(笑)、教養学部の人間が中心になって作ったんです。お蔭様で一般の書店では結構注目されているらしいんですが、肝心の、大江先生がかつて『エリオット』を買われた駒場の生協や本郷の生協では学生への売上が今ひとつで期待したほどではないようです(笑)。

専門分化と教養教育

大江　学生諸君や若い人達の中に「反教養主義」というものがあるんですか?

古田　学生がなかなか本を読まないということもありますが、やはり、大学全体の大きな問題のひとつは「専門分化」でしょうか。狭い分野の専門家になってしまって異分野の専門家と言葉が通じないという状況があります。優秀であればこそ、狭いところに入り込んでしまうわけですが、小宮山総長が入学式で言われた「他者を感じる力」という言葉は「全体性を回復しなければ」という危機意識から出てきたのではないかという気がするんです。

大江　私は優秀な人達が専門的に細分化した深みに入っていくのはいいことだと思うんです。それがなければ、世界的な科学の進歩に追いついていけないでしょう。小宮山総長のおっしゃる「先頭を走る人」が必要なわけですね。ですから、狭いところに入ること、自分を専門家として磨くことは、東大が学生に求めることの中で当然重要なことでしょう。狭いところに入っていく人は少数派であって、その中の天才が科学の発明などをするんだ、と。

古田　細分化したところに入って行った人々の中に基礎としての「教養」があるかどうかの問題なんですね。

大江　そちらから言えば、まさに。大学は違った分野の人間と言葉を共有する訓練をするのにいいところです。私は駒場の教養課程では理科の科目に地学をとってじつに面白かった。しかも理科系の人達と話したことが「科学をやる人間への信頼」を私に与えました。今でも信頼しています。その経験から、教養学部で理科系の人と文科系の人の間に友情が生ずればそれは強い有効な絆になると思うんですね。それを祈っています。

この前、ドイツで私の翻訳のリーディング即売会をやってきたんですが、私の小説のリーディングにたくさんの方が来てくださったわけですね。10カ所で2400 人くらい。本も700 冊以上売れたんです。それを目の当たりにして「ドイツにはなお本を読む人達の厚い層がある」と思いました。今度、フランスでも同じことをしますが、同じ反応があるんじゃないでしょうか。かつて日本にも教養主義の伝統があって「本を読む厚い層」が存在していまし

少数の学生しかいなくても高い教育が行なわれている場所があるということが大学のひとつの側面でしょう。それは世界的に普遍なものです。

— 大江 —

た。そんな日本の教養主義の伝統が生き返ってほしいと私は思うんです。

私達の頃のフランス文学のクラスは40人もいたのに今は少ないらしい。それはそれでいいと思います。大学以外の場所でいくらでもフランス語を学べる時代ですから狭いものとしてフランス文学を学ぶ人達はむしろ少なくていい。しかし、法人化した大学が「フランス語をやる人が少ないから規模を小さくして先生方もリストラしよう」なんていうことがあれば私は反対なんです。少数の学生しかいなくても高い教育が行われている場所があるということが大学のひとつの側面でしょう。それは世界的に普遍なものです。法人化しても、東大はあまり流行らない学部に金を投じることが大切だと私は思うんです。

「知る」「解る」から「さとる」へ

古田　2006年度には、高校まで新しい学習指導要領で学んだ学生が入学してくるものですから、それを意識して、現在、カリキュラム改革の準備をしています。そこで「教養課程で2カ国語を学ぶ形を続けるか否か」という問題がありまして。特に理科は高校までに勉強する量が減ってしまったので、それを大学で補わなければならない。当然、その分、教養課程での理科の必修が増える。ですから、今は第二外国語を初修外国語と呼んでいるんですが、「理科系の初修外国語をどうしようか」という議論をしました。すると、理科系の学部長から「ぜひ本学では2カ国語を学ぶスタイルを続けてほしい」という、教養学部の立場から言えば心強いサポートがありました。「理科系の人間が将来、仕事で外国に行った場合、現地の言葉をマスターできるかどうかが重要な意味を持つ。だから駒場での初修外国語の勉強で語学を体系的に学ぶ方法を知ることに大きな意味がある」とのことでした。それで、本学では理系でも2カ国語履修体制を崩さない流れになっています。そんな状況を幸いに、私は「文科三類は英語以外にアジア系言語とヨーロッパ系言語、計3カ国語を必修にしたらどうか」と提案したんです。いきなりそこまで行くのは早急かもしれませんが(笑)。

大江　外国語を知っていることは、生きていくうえで、ものを考えるうえで、とにかく便利だと思うんです。英語で言われたことがどうしても日本語としてうまく入ってこない時に、フランス語と英語の間を繋いでみると「こういう言葉か」と解る場合がある。私は日本語を書きながら、いつもフランス語と英語の光が差してくるところで、仕事をしてきた。それが私の文学のやり方なんです。だから外国語の引用ばかりではないかという悪い評判もあるんですが(笑)。

古田　私も「外国語をマスターすることは教養の面でも実学の面でも有用なことだ」と思っております。

大江　この前、高等学校に行って講演をしたんですが、事前にそこの女子生徒の方から「『知る』ための話ではなくて、『解る』ための話をしてくれ」という手紙が来たんです。それで、私は今まで「知る」と「解る」をどのように区別して生きてきたかを考えてみたわけなんです。まず、私は柳田国男全集の索引を眺めました。索引を見て「知ることについて、日本人はどう考えてきたか」という柳田の文章があれば、学生諸君にそれを教えるのが一番いいと思ったからです。ところが、索引に「尻」のつく項目はいくらでもあるんですが、「知る」はないんです。「解る」も調べたんですが、「若」はあるのに「わかる」はないんです。そこで私が考えたのは、柳田が言っている「学ぶ」と「覚える」の違いです。「学ぶ」というのは「まねぶ」から来ているから、先生の真似をして教わることだ、と。それが本当に自分のものとなって「覚える」となる。自転車に乗ることを覚えた人は一生忘れない。すなわち、「学ぶ」と「覚える」の違いは「一方的に与えられた知識が自分のものになっていく過程」と「自分のものとなったものを実用化できる過程」だろうと私は結論づけたわけです。柳田は「覚える」の次は「さとる」だと言っています。実際にそれを使っているうちに、学びもしないし、覚えてもいない新しいことが浮かんでくることを「さとる」とい

うんだと。そこで、私は「知る」「解る」の上の段階もやはり「さとる」だと思ったんです。そのことを講演会でお話ししたんですが、反響はなかった。「さとる」が古かったか(笑)。

大学教育は基本的に「学ぶ」わけですね。先生の真似をして学ぶ。それから、特に英語やフランス語をうまく使える人達は「覚える」。その先にある「さとる」に自発的に自分の考えを作り出す行為がある。すなわちrepresentすること。表現し、代弁し、かつ主張すること。学ぶ、覚える、そして、さとる。この「さとる」の段階が、みんなと一緒に社会に対して発言できる「知識人」になることではないかと思うんです。

駒場にいた時に教わったことが今でも自分のものの考え方、生き方の基本にあると最初に申し上げました。現代のようにrepresentationが多様化している時代に自分の考え方や生き方の根幹になる数少ない発見を大学の 1、2年でしてほしい。それはどんな方向に行っても、どんな狭い研究についても役に立つものではないか、と思っています。

古田　ありがとうございます。最後はまとめていただいた感じですが……教養教育、そして教養学部の存在意義についてお話をしていただきまして、教養学部の教師としては非常に感謝しております。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

＜2005年11月10日、本学駒場キャンパス内ファカルティクラブ橄欖にて＞

大江健三郎　略歴

1935年	愛媛県に生まれる。
1954年	本学文科二類に入学。
1956年	フランス文学科に進み、渡辺一夫博士に師事。
1957年	東京大学新聞に掲載された『奇妙な仕事』で学生作家としてデビュー。
1958年	『飼育』により芥川賞受賞。短編集『見るまえに跳べ』刊行。
1959年	本学フランス文学科卒業。
1964年	『個人的な体験』により新潮社文学賞受賞。
1967年	『万延元年のフットボール』により谷崎潤一郎賞受賞。
1969年	『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』刊行。
1973年	書き下ろし長編『洪水は我が魂に及び』により野間文芸賞受賞。
1984年	講演集『日本現代のユマニスト　渡辺一夫を読む』刊行。
1994年	ノーベル文学賞受賞。
1995年	ノーベル賞記念講演『あいまいな日本の私』刊行。
1996年	米プリンストン大学の客員講師に。
1999年	ベルリン自由大学客員教授に。「日本作家の現実」というテーマで講義。
2000年	米ハーバード大から名誉文学博士号を授与される。
	ノーベル経済学賞受賞者アマーティア・セン教授との往復書簡。
2001年	朝日新聞夕刊紙上にN・チョムスキー氏との往復書簡掲載。
2002年	朝日新聞夕刊紙上にE・W・サイード氏との往復書簡掲載。
2004年	「九条の会」の集まりにて沖縄などで講演。
2005年	「大江健三郎賞」創設。『さようなら、私の本よ！』刊行。